

年表 1 明治・大正 誕生～高井戸「三蔦苑」設立～家族の形成

年(西暦・和暦)	年齢	できごと
1880 明治 13		11月、青森県三戸郡五戸町の呉服商の家に生まれる(本名・幸三郎)。
1898 明治 31	18	仙台の第二高等学校予科第一部に入学。 在学中に聖書を耽読し、トルストイに心酔。
1900 明治 33	20	同郷出身の青年学生たちと雑誌『北星』を創刊。
1901 明治 34	21	東京帝国大学(現・東京大学)法律学科に入学。(のちに政治学科に転科し、中退)。 小石川の白山道場に渡辺南隠を訪ね、座禅を始める。
1902 明治 35	22	三宅雪嶺主宰の雑誌『日本人』に寄稿。(以後、明治40年まで、同誌に29編の論文を寄稿)
1905 明治 38	25	関村ミキと学生結婚。 無政府主義者・クロポトキンの著書を読み、強い影響を受ける。
1907 明治 40	27	長女・不二が生まれる。 この頃、キリスト教思想家の新井奥邃を知り、その示唆もあり農場経営を志す。
1908 明治 41	28	散歩中に、社会主義者・幸徳秋水と出会う。吉田清太郎牧師より洗礼を受ける。
1909 明治 42	29	一時期、秋田県花輪町のミキの実家に住み、青森県から秋田県にまたがる原野に、集団農場(「太陽農場」)の構想を持つ。
1910 明治 43	30	父・庄兵衛が死去。 長男・十蔵が生まれる。 この頃、詩人・農民運動家の堀井梁歩を知る。
1911 明治 44	31	3月、東京府豊多摩郡千歳村船橋(現・世田谷区)に移住。徳富蘆花らの紹介で小作地を借り、妻・ミキ、親友の弟・小平英男とともに「百性(ひやくしょう)愛道場」を開き、帰農する。 12月、無政府主義者・石川三四郎、渡辺政太郎の訪問を受ける。
1913 大正 2	33	高井戸村字原(現・高井戸東)に移り、ミキ、小平英男とともに農場「三蔦苑(さんちょうえん)」の経営を開始。温床による花卉栽培、鶏卵販売を始める。
1914 大正 3	34	次男・復が生まれる。 学校教育を否定。長女・不二の就学を拒否し自宅教育を開始。
1915 大正 4	35	長男・十蔵が死去(享年6歳)。 この頃、中里介山を知る。
1916 大正 5	36	次女・従子が生まれる。 農業経営改善のため、豊島師範学校併設豊島農業補習学校(夜学)で農事講習を受ける。 この頃、水野葉舟、山村暮鳥、高村光太郎、高田博厚、柳敬助を知る。
1917 大正 6	37	大杉栄、伊藤野枝の訪問を受ける。
1918 大正 7	38	三男・定之進が生まれる。
1919 大正 8	39	子供たち4人を自宅教育。語学教育の方針を立てる。
1921 大正 10	41	敷地内に、高村光太郎の設計による「可愛御堂(かわいみどう)」を建立。献堂式を行う。下中弥三郎(後の平凡社・社長)らが発案者に名を連ねた。
1922 大正 11	42	『或る百姓の家』を出版。
1923 大正 12	43	関東大震災の時、朝鮮人学生・金三奎ら3人を自宅に保護する。 この頃、禅僧・沢木興道老師と知り合う。
1924 大正 13	44	『土と心とを耕しつつ』を出版。 友人・三浦辰次郎の招きにより渡米し、各地を農業視察。
1925 大正 14	45	安藤昌益を研究する。
1926 大正 15	46	物理学と数学との暗示から「場」の思想的構想を得る。

年表2 昭和・没後 思想体系の確立～没後の動き

年(西暦・和暦)	年齢	できごと
1927 昭和2	47	青森県内の有志と「民族自己の道建設社」を創設。 農民自治会の依頼で、長野県各地で講義(以後、晩年まで長野県を訪問し、講義を続ける)。 満州・大連の加藤襄の招きにより、朝鮮、満州を旅行。
1928 昭和3	48	自らの思想体系である「家稷農乗学(かしょくのうじょうがく)」の骨組みをほぼ固め、「農乗曼荼羅」を完成。大西伍一が主宰する「農村教育研究会」の顧問に就任。
1930 昭和5	50	長野県、青森県、秋田県、新潟県で講義。以後、各地に狄嶺を中心とする会ができ、講義に赴く。
1931 昭和6	51	孫・雪子が生まれる(長女・不二の娘)。 独自の教育論である「単校教育」を発想する。
1935 昭和10	55	自邸内に家塾「牛欄寮」を開設。1942(昭和17)年まで、多数の知識人が、特別講義を行う。
1939 昭和14	59	『地涌のすがた』を出版。 満州鉄道の招へいで、満州各地を講演旅行。
1944 昭和19	64	静岡県修善寺の裏山に小庵を借り「黒豆庵」と名付ける。 12月、黒豆庵滞在中に死去。
年(西暦・和暦)		できごと
1945 昭和20		狄嶺の遺業継承を目的とする「農乗狄嶺会」が発足。
1956 昭和31		参議院会館にて阿部能成らが「江渡狄嶺をしのぶ会」を開催。
1958 昭和33		『場の研究』(山川時郎・編)を出版。
1959 昭和34		有志による『江渡狄嶺研究』の刊行が始まる。
1960 昭和35		三蔦苑に伝わる高村光太郎作の彫刻「老人の首」を、東京国立博物館に寄贈。
1963 昭和38		敷地内に「狄嶺文庫」が建つ。
1967 昭和42		青森県立図書館で「江渡狄嶺回顧展」開催。
1968 昭和43		「農乗狄嶺会」を引き継ぎ、「狄嶺会」が発足。膨大な資料の整理、及び、第13号以降の『江渡狄嶺研究』発行を継承。
1970 昭和45		青森県八戸市立図書館で「江渡狄嶺展」開催。
1971 昭和46		妻・ミキが死去。『ミキの記録』(大西伍一・編)刊行。
1973 昭和48		『江渡狄嶺書誌』(大西伍一・編)刊行。 次男・復が死去。
1977 昭和52		狄嶺会五戸支部が発足(のちに七戸支部も発足)。
1978 昭和53		狄嶺生誕100年に向け、狄嶺文庫の入口に銅銘版を設置。
1979 昭和54		『江渡狄嶺選集(上下)』(家の光協会)出版。
1994 平成6		『江渡狄嶺一場の思想家』(和田耕作・著、甲陽書房)出版。
1995 平成7		『江渡狄嶺研究』第28号が刊行される。
2001 平成13		狄嶺会所属の研究者たちによる『現代に生きる江渡狄嶺の思想』(斎藤知正、中島常雄、木村博・編、農文協)出版。
2008 平成20		週刊文春に連載の小説『ポリティコン』(桐野夏生・著)で、作中人物が江渡狄嶺に言及。
2010 平成22		『場の教育―土地に根ざす学びの水脈』(岩崎正弥、高野孝子・著、農文協)出版。文中で、教育者としての狄嶺を紹介。

すぎなみ学倶楽部

<http://www.suginamigaku.org/>

杉並の歴史からラーメンまで